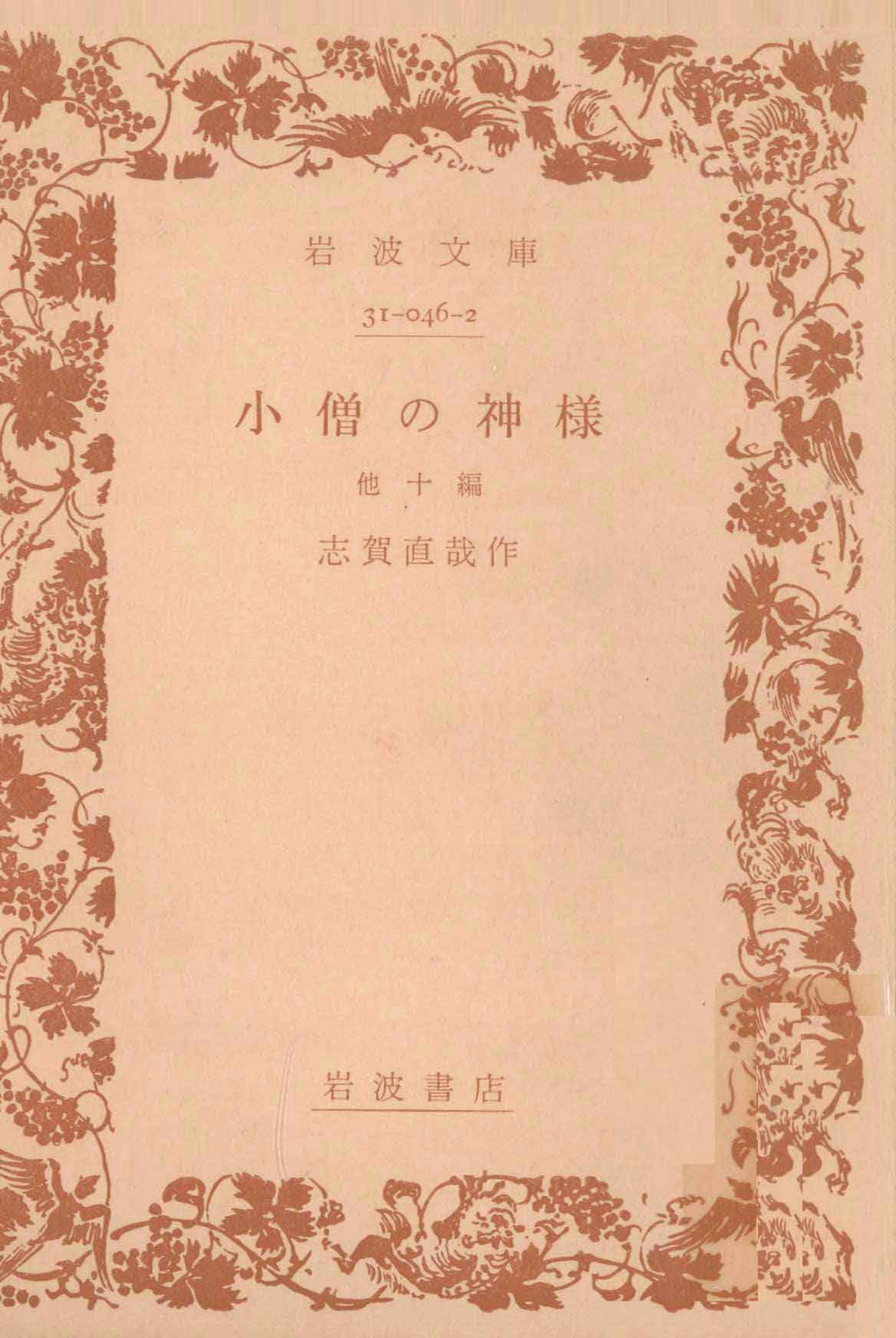




岩波文庫

31-046-2

小僧の神様

他十編

志賀直哉作

岩波書店

昭和三年八月二五日 第一刷 発行
昭和四年六月一六日 第四四刷 改版 発行 ©
昭和四九年七月二〇日 第五一刷 発行

小僧の神様

定価 ★★

作者 志賀直哉

発行者 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号 岩波雄二郎

印刷者 東京都板橋区板橋四丁目四七番七号 山田博

発行所 東京都千代田区一ツ橋三ノ五 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・田中製本

岩 波 文 庫

31-046-2

小 僧 の 神 様

他 十 編

志 賀 直 哉・作



岩 波 書 店

目次

小僧の神様	五
正義派	二三
赤西蠣太	三五
母の死と新しい母	六三
清兵衛と瓢箪	七七
范の犯罪	八七
城の崎にて	一〇七
好人物の夫婦	一二九
流行感冒	一四一
たき火	一七一
真鶴	一八九
あながき	一九九

小僧の神様

一

仙吉は神田のある秤屋の店に奉公している。

それは秋らしい柔らかな澄んだ日さしが、紺のだいぶはげ落ちたのれんの下から静かに店先にさし込んでいる時だった。店には一人の客もない。帳場格子の中にすわって退屈そうに巻き煙草をふかしていた番頭が、火鉢のそばで新聞を読んでいる若い番頭にこんなふうには話しかけた。

「おい、幸さん。そろそろお前の好きな鮓の脂身が食べられるころだね」

「ええ」

「今夜あたりどうだね。お店をしまってから出かけるかね」

「結構ですな」

「外濠に乗って行けば十五分だ」

「そうです」

「あの家のを食っちゃア、このへんのは食えないからネ」

「全くですよ」

若い番頭からは少しさがったしかるべき位置に、前掛けの下に両手を入れて、行儀よくすわっ

ていた小僧の仙吉は、「ああすし屋の話だな」と思って聞いていた。京橋きょうばしにSという同業の店がある。その店へ時々使いにやられるので、そのすし屋の位置だけはよく知っていた。仙吉は早く自分も番頭になって、そんな通つうらしい口をききながら、勝手にそういう家ののれんをくぐる身分になりたいものと思った。

「なんでも、与兵衛よへえのむすこが松屋まつやの近所に店を出したという事だが、幸さん、お前は知らないかい」

「へえ存じませんな。松屋というところのです」

「私わたしもよくは聞かなかったが、いずれ今川橋いまがわばしの松屋だろうよ」

「そうですか。で、そこはうまいんですか」

「そういう評判だ」

「やはり与兵衛よへえですか」

「いや、なんとかいった。何屋とかいったよ。聞いたが忘れた」

仙吉は「いろいろそういう名代なだいの店があるものだな」と思って聞いていた。そして、

「しかしうまいというとゼンたいどういう具合にうまいのだろう」そう思いながら、口の中にたまって来る唾つばきを、音のしないように用心しいしい飲み込んだ。

二

それから二三日した日暮れだった。京橋のSまで仙吉は使いに出された。出がけに彼は番頭から電車の往復代だけをもらって出た。

外濠そとぼりの電車を鍛冶橋かじばしでおりると、彼はわざとすし屋の前を通って行った。彼はすし屋ののれんを見ながら、そののれんを勢いよく分けては行って行く番頭たちの様子を思った。その時彼はかなり腹がへっていた。脂あぶらで黄がかった鮪まぐろのすしが想像の目に映ると、彼は「一つでもいいから食いたいものだ」と考えた。彼は前から往復の電車賃をもらうと片道を買って帰りは歩いて来る事をよくした。今も残った四銭がふところの裏隠しでカチャカチャと鳴っている。

「四銭あれば一つは食えるが、一つくださいとも言われないし」彼はそうあきらめながら前を通り過ぎた。

Sの店での用はすぐ済んだ。彼は真鍮しんちゅうの小さい分銅ぶんどうのいくつかはいった妙に重みのある小さいボール箱を一つ受け取ってその店を出た。

彼は何かしらひかれる気持ちで、もと来た道のほうへ引きかえして来た。そして何げなくすし屋のほうへ折れようとする、ふとその四つ角よっかくの反対側の横町に屋台やたいで、同じ名ののれんを掛け、たすし屋のある事を発見した。彼はノソノソとそのほうへ歩いて行った。

三

若い貴族院議員のAは同じ議員仲間のBから、すしの趣味は握るそばから、手づかみで食う屋台のすしでなければわからないというような通^{つう}をしきりに説かれた。Aはいつかその立ち食いをやってみようと考えた。そして屋台のうまいというすし屋を教わっておいた。

ある日、日暮れもない時であった。Aは銀座のほうから京橋を渡って、かねて聞いていた屋台のすし屋へ行ってみた。そこにはすでに三人ばかり客が立っていた。彼はちよつと躊躇^{ちゆうちょ}した。しかし思い切つてとにかくのれんをくぐったが、その立っている人と人の間に割り込む気がしなかった。彼はしばらくのれんをくぐったまま、人の後ろに立っていた。

その時不意に横合^{よこあ}いから十三四の小僧がはいって来た。小僧はAを押し^おしのけるようにして、彼の前のわずかな空^すきへ立つと、五つ六つすしの乗っている前下がりの厚い檨^{けやき}板の上をせわしく見回した。

「のり巻きはありませんか」

「ああきょうはできないよ」太ったすし屋の主^{あるじ}はすしを握りながら、なおジロジロと小僧を見ていた。

小僧は少し思い切った調子で、こんな事は初めてじゃないというように、勢いよく手を延ばし、

三つほど並んでいる鮪まぐろのすしの一つをつまんだ。ところが、なぜか小僧は勢いよく延ばしたわりにその手をひく時、妙に躊躇ちゅうちよした。

「一つ六銭だよ」と主あるじが言った。

小僧は落とすように黙ってそのすしをまた台の上に置いた。

「一度持ったのを置いちゃあ、しようがねえな」そう言って主は握ったすしを置くと引きかえに、それを自分の手元へかえした。

小僧は何も言わなかった。小僧はいやな顔をしながら、その場がちょっと動けなくなった。しかしすぐある勇気を振るい起こしてのれんの外へ出て行った。

「当今はすしも上がりましたからね。小僧さんにはなかなか食べられませんよ」主は少し具合悪そうにこんな事を言った。そして一つを握り終わると、その空あいた手で今小僧の手をつけたすしを器用に自分の口へ投げ込むようにしてすぐ食ってしまった。

四

「このあいだ君に教わったすし屋へ行ってみたよ」

「どうだい」

「なかなかうまくいった。それはそうと、見てみると、皆みんなこういう手つきをして、魚さかなのほうを下

にして一ペンに口へほうり込むが、あれが通つうなのかい」

「まあ、まぐろは大概ああして食うようだ」

「なぜ魚さかなのほうを下にするのだろう」

「つまり魚が悪かった場合、舌へヒリリと来るのがすぐ知れるからなんだ」

「それを聞くとBの通つうも少し怪しいもんだな」

Aは笑いだした。

Aはその時小僧の話をした。そして、

「なんだかわいそうだった。どうかしてやりたいような気がしたよ」と言った。

「ごちそうしてやればいいのに。いくらでも、食えるだけ食わしてやると言ったら、さぞ喜んだろう」

「小僧は喜んだろうが、こっちが冷や汗ものだ」

「冷や汗？　つまり勇気がないんだ」

「勇気かどうか知らないが、ともかくそういう勇気はちょっと出せない。すぐいっしょに出てよそでごちそうするなら、まだやれるかもしれないが」

「まあ、それはそんなものだ」とBも賛成した。

五

Aは幼稚園に通^{かよ}っている自分の小さい子供がだんだん大きくなって行くのを数の上で知りたい気持ちから、風呂場^{ふろば}へ小さな体量秤^{たいりょうばかり}を備えつける事を思いついた。そしてある日彼は偶然神田の仙吉のいる店へやって来た。

仙吉はAを知らなかった。しかしAのほうは仙吉を認めた。

店の横の奥へ通ずる三和土^{たつき}になった所に七つ八つ大きいの中から小さいのまで荷物秤が順に並んでいる。Aはそのいちばん小さいのを選んだ。停車場や運送屋にある大きな物と全く同じで小さい、そのかわいい秤を妻や子供がさぞ喜ぶことだろうと彼は考えた。

番頭が古風な帳面を手にして、

「お届け先はどちら様でございますか」と言った。

「そう……」とAは仙吉を見ながらちよっと考えて、「その小僧さんは今、手すきかね？」と言った。

「へえ別に……」

「そんなら少し急ぐから、私といっしょに来てもらえないかね」

「かしこまりました。では、車へつけてすぐお供をさせましょう」

Aは先日ごちそうでできなかった代わり、きょうどこかで小僧にごちそうしてやろうと考えた。

「それからお所とお名前をこれへ一つお願いいたします」金を払うと番頭は別の帳面を出して来てこう言った。

Aはちよつと弱った。秤はかりを買う時、その秤の番号といっしょに買い手の住所姓名を書いて渡さねばならぬ規則のある事を彼は知らなかった。名を知らしてからごちそうするのは同様に冷や汗の気がした。しかたなかった。彼は考え考えでたらめの番地とでたらめの名を書いて渡した。

六

客はかげんをしてぶらぶらと歩いている。その二三間げん後ろから秤を乗せた小さい手車を挽いた仙吉がついて行く。

ある俤宿くるまやどの前まで来ると、客は仙吉を待たせて中へはいって行った。まもなく秤はしたくのできた宿俤やどくるまに積み移された。

「では、頼むよ。それから金は先でもらってくれ。その事も名刺に書いてあるから」と言ってお客は出て来た。そして今度は仙吉に向かって、「お前も御苦労。お前には何かごちそうしてあげたいからそのへんまでいっしょにおいで」と笑いながら言った。

仙吉はたいへんうまい話のような、少し薄気味悪い話のような気がした。しかしなにしろうれしかった。彼はペコペコと二三度続けざまにお辞儀をした。

そば屋の前も、すし屋の前も、鳥屋の前も通り過ぎてしまった。「どこへ行く気だろう」仙吉は少し不安を感じだした。神田駅かんだえきの高架線の下をくぐって松屋の横へ出ると、電車通りを越して、横町のある小さいすし屋の前へ来てその客は立ち止まった。

「ちょっと待ってくれ」こう言って客だけ中へはいり、仙吉は手車の梶かじ棒ぼうをおろして立っていた。

まもなく客は出て来た。その後ろから若い品しんのいいかみさんが出て来て、

「小僧さん、おはいりなさい」と言った。

「私は先へ帰るから、充分食べておくれ」こう言って客は逃げるように急ぎ足で電車通りのほうへ行ってしまった。

仙吉はそこで三人前のすしを平らげた。飢えきったやせ犬が不時の食にありついたかのように彼はががつとたちまちの間に平らげてしまった。ほかに客がなく、かみさんがわざと障子を締め切って行ってくれたので、仙吉は見得みえも何もなく、食いたいようにしてたらふくに食う事ができた。

茶をさしに来たかみさんに、